



2013年5月11日(土)吾輩の主人の作品を勉強していらっしゃる方に紹介されて「フランシス・ベーコン展」を観に行きました。激しい性格は主人だけでたくさんとっていましたが、独特ながら充実した作品群でした。ピカソと並ぶ美の巨匠だそうです。
2013年3月8日(金)～5月26日(日) 東京国立近代美術館



- フランシス・ベーコン(Francis Bacon 1909.10.28～1992.4.28) アイルランドのダブリン生まれ。イギリスを拠点に活躍した画家。同姓同名の哲学者の傍系の子孫と言われている。
- 同性愛者で暴力的作品が多い。内面と外面の境界である「叫び」と自他の境界である「皮膚」の表現が長い間のテーマ。恋人のジョージ・ダイア(チケット絵のモデル)が自殺して後、70歳代後半に若いジョン・エドワーズと付き合い始めてから穏やかな作風が変わる。

■ 製作に関して

『**絵画の内容は最小限に抑えなければならない**』という原則を貫いた。

生涯のテーマは「肖像／筋肉美／建築学的立体枠の中に描く歪められた身体」

画面を3分割した「三幅対(さんぷくつゐ)」は、画面の中で動きの切り替えが出来るため好んだ。

ガラスによって、「見るもの」と「見られるもの」の隔たりがあることを好んだ。

また傘を描くことを好んだ。それは人間を守る物であると同時に、尖った部分が人を傷つける物。

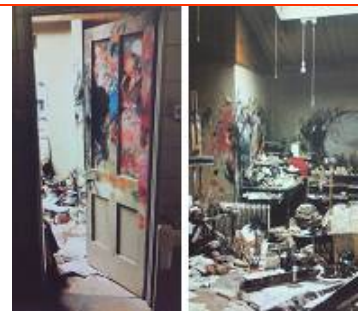
ミケランジェロの肉体表現、ピカソの作品に影響を受ける。ゴッホの特徴的連作ではなく、彼が生涯に1点しか描かなかった「道端を歩く画家の姿」の画を参考に、彼の原色の色使い、荒い表現にも挑戦。エジプトのスフィンクス画の頭部は人間。物によってはネクタイ着用のスーツ姿にも見える。無神論者だったがベラスケスの影響を受けて、彼の描く教皇を「最高権力を持っているから」という理由で描くことを好んだ。但しその時ベラスケスの画を実際に観てはいない。それは他人の影響を受けたくなかったから。本人曰く「他人の作品を模して成功したものはない」人物・動物などの切抜き資料を壁に貼りスケッチして薄い絵の具で描いていくが、**製作はインスピレーションが来るまで待つ**。

- 高級パブと場末のバー、両方の世界と付き合いがあった。飲んだ後の頭の冴えが発想に効果あり。
- ジャン・コクトーのように画面の中に死の影を感じながら、自死したジョージ・ダイアの面影を描くと同時に自分の肖像画も描いていった。彼の中でジョン・エドワーズに出会うまではダイアは忘れがたい恋人であったようだ。

本人談の記録から

- 『無意識の世界に入って描く。現実世界は藝術ではない』
- 『どうやったら理想的でないやり方で作品を作れるだろう。見た目のイメージで作り直すのではなく、私たち自身が把握しているあらゆる感覚の領域を作り替えたい』(デビッド・シルベスターのインタビュー1962)
- 『17歳の時、道端の犬の糞を見て、人生とはこんなものだと悟った』(同インタビュー1975)
- 『**俺の絵画が暴力的なのではない。人生が暴力的なのだ**』

吾輩の主人：夏目漱石に『草枕』という小説がある。その文章の背景に「無意識の世界で描けるのが画家であり、その表現が藝術である」という意味合いのことを含ませているが、フランシス・ベーコンはそういった意味で真正の藝術家であった。また『草枕』に出てくる「トリストラム・シャンディー」の作家：ローレンス・スターンは「かく者は自己であるが、かく事は神の事である」と表現物については天の啓示に従ったが、ベーコンはインスピレーションの訪れを待って、自己を無意識の世界(無我の境地)へ投入して描いた。自他の境界を超える瞬間の画もある。



絵葉書より「ベーコンのアトリエ」